

# 自己の中の「他者」

——“The Artificial Nigger”における人種と啓示——

北 口 未 来

**Abstract** : “The Artificial Nigger” is one of the finest short stories of Flannery O’Connor. Mr. Head takes his grandson, Nelson, to Atlanta to see black people there because there are no blacks in their own rural vicinity. One aim of the trip is to make Nelson a racist, but Mr. Head also has another aim in mind. On their journey, Nelson is charmed by some black woman he sees in Atlanta, and at the end of the trip, they encounter a statue of a lawn jockey which is black and male in appearance; yet these encounters, one with living people and the other with a statue, seem to serve the same purpose for them. This paper, by linking the issues of race and family, aims to demonstrate the underlying similarity between the two main characters, and thereby present a fresh reading of the story’s controversial final scene.

## 1. はじめに

Flannery O’Connor は “The Artificial Nigger” を “my favorite and probably the best thing I’ll ever write” と称した (*Mystery and Manners* 48)。多くの研究者は本作を難解であると評するが、その難解さを生むのは最後に主人公たちが黒人の像を介して経験する啓示の描写故であろう<sup>1</sup>。

黒人像を前にして Mr. Head と Nelson が経験する宗教的な救済の感覚と、彼らの関係が修復される理由について、Jordan Rowan Fannin は、黒人が受けた苦しみを Mr. Head が黒人像を見ること通して認め、責任を負ったからだと指摘し (319)、John F. Desmond は Mr. Head の人種的な価値観の変化を通して、黒人像が神秘的な力を体現したためと述べる (50)。確かに最後の場面は Mr. Head が経験する贖いの感覚をある程度肯定的に受け止めることを読者に強いる。

Jeanne Perreault が指摘するように、Mr. Head は黒人に対する差別意

識を Nelson に持たせるために彼を街に連れていく (393)。Mr. Head が最終場面で啓示を受けているという解釈は、Mr. Head が旅を通して差別意識を克服したという読みを暗黙の前提とする。しかし、本論で示していくように、Mr. Head と Nelson の啓示の感覚はむしろ人種的な他者性の抑圧を伴う。そのような抑圧への過程とは、Nelson と Mr. Head の一体化ともいえる相互依存関係が黒人との遭遇を通して、変容、崩壊し、回復する過程である。本論では、その過程を詳細に見ていくことで、本作品の最後の場面について、新たな解釈を提供したい。

## 2. Nelson と Mr. Head の一体関係

アトランタに Nelson を連れていき、都会に対して幻滅させることで、彼が現在の田舎暮らしに充足することを Mr. Head は望んでいる。そうすることで、「自分は思っているほど賢くない」と孫に気づかせようとするのだ (211)。Mr. Head は Nelson がアトランタで自らの無知を自覚することが彼の成長に必要なだと考えている。

しかし、アトランタ行きを経験することで、Nelson が都会に魅了されてしまっただけではない。Mr. Head は人種差別の「規範」を教え込むことで、黒人がいるアトランタは魅力的な場所でないとして Nelson に思わせようとしている。したがって電車の中で Nelson が初めて目にする黒人は物語において重要な存在である。この黒人について Mr. Head は、Nelson に “What was that?” と聞く。

“A man,” the boy said and gave him an indignant look as if he were tired of having his intelligence insulted.

“What kind of a man?” Mr. Head persisted, his voice expressionless.

“A fat man,” Nelson said. He was beginning to feel that he had better be cautious.

“You don’t know what kind?” Mr. Head said in a final tone.

“An old man,” the boy said and had a sudden foreboding that he was not going to enjoy the day.

“That was a nigger,” Mr. Head said and sat back. (216)

彼らは目の前で、黒人が食堂車両を移動していくのを目にするが、Ralph C. Wood が指摘する通り (145)、この描写は富裕な黒人ですら食堂車両から最も遠い黒人車両に乗ることを強要された当時の社会状況を示している。しかし Mr. Head は、そのような南部特有の差別状況に言及せず、Nelson に彼が「黒人を知らない」という事実だけを突きつけようとする。

Mr. Head に “What was that?” と問われ、Nelson は彼が黒人であるとは答えられない。Christina Bieber Lake はこの Nelson の反応をもって、人種という概念を持つ前のイノセントな人間の性質を読み取る (102)。しかし茶色い肌の黒人が存在することを Mr. Head に教わっていなかったとしても、自身との肌の色の違いを指摘しないのは不自然ではないか。電車内で相手（黒人）と自分（白人）の差異を見落とす観察眼の欠如は、人種問題という高度に社会的な認識の問題に紐づけるより前に、他者と自身の境界線を識別する能力の未発達を示していると考えたほうが良い。つまりもっとも身近な他者である Mr. Head から Nelson が未だ精神的に分離できていないことを、引用のやりとりは含意している。

黒人を見て黒人と答えることができない Nelson は、自分の無知を突きつけられ、祖父ではなく黒人を憎む。

He felt that the Negro had deliberately walked down the aisle in order to make a fool of him and he hated him with a fierce raw fresh hate; and also, he understood now why his grandfather disliked them. (216)

この引用については後でも触れるが、人種差別の感覚は Mr. Head の狙

いどおり、Nelson の中に宿るように見える。

先に見た Nelson の未分化の自己は、実は物語の冒頭から象徴的に描かれている。Nelson に関する最初の描写は月明かりが差し込む部屋で眠る彼の寝姿に関するものだが、その様子は “his knees under his chin and his heels under his bottom” と描かれ、胎児の姿を彷彿とさせる (210-11)。また、Nelson と祖父の外見的な類似が以下の様に描かれる。

They were grandfather and grandson but they looked enough alike to be brothers and brothers not too far apart in age, for Mr. Head had a youthful expression by daylight, while the boy's look was ancient, as if he knew everything already and would be pleased to forget it. (212)

「年の近い兄弟の様に」という形で強調される、祖父と孫の外見の酷似は、単に容姿が似ているという以上の精神的なつながりを示唆する。しかし、子供である Nelson と老人の Mr. Head の外見が、年の離れていない兄弟の様に描かれているということは、精神的な未分化の問題が、Nelson だけではなく、Mr. Head の問題でもあることを表している。Mr. Head はおそらく Nelson が自身から分化していない状態に依存しており、その状態のまま、Nelson が一生「家」にとどまることを望んでいる。“Mr. Head meant him to see everything there is to see in a city so that he would be content to stay at home for the rest of his life” (211-12).

Mr. Head にとって Nelson が「アトランタ生まれである」と、彼らの違いを主張することは不都合だ。Nelson が Mr. Head を他者として認識し、「自己」を発見してしまうことを防ぐために、彼は Nelson がアトランタについて何も知らないことを自覚させようとする。そして、Nelson のアトランタに対する無知は、彼が黒人を知らないことによって証明されると Mr. Head は考えているのだ。

### 3. 黒人女性の「他者性」と「母性」

アトランタに着いて以降、Nelson の視線が人物を捉える描写がほとんどないのに対して、黒人街に入ると彼が黒人たちに意識を向ける描写が頻出する。そのような Nelson の強くひきつける存在が現れる。

He stood drinking in every detail of her. His eyes traveled up from her great knees to her forehead and then made a triangular path from the glistening sweat on her neck down and across her tremendous bosom and over her bare arm back to where her fingers lay hidden in her hair. He suddenly wanted her to reach down and pick him up and draw him against her and then he wanted to feel her breath on his face. He wanted to look down and down into her eyes while she held him tighter and tighter. He had never had such a feeling before. He felt as if he were reeling down through a pitch-black tunnel. (223)

これは迷い込んだ黒人街で家の前に座る女性に Nelson が道を尋ねた後の場面である。他者を見つめる様子が描写されてこなかった Nelson であるが、ここでの彼は女性の膝から指先に至るまで凝視する。このような注視の最後に、Nelson は彼女に抱きしめられ、取り込まれることを望み、そのイメージに没入してしまうのだが、そのような恍惚とした彼の体験は Mr. Head に腕をひかれることによって終わりを迎える。この黒人女性について、作者 O'Connor は知人への手紙において、その「母性」を指摘している。

[H]e not only has never seen a nigger but he didn't know any women and I felt that such a black mountain of maternity would

give him the required shock to start those black forms moving up from his unconscious. (“To Ben Griffith” 931)

Katherine Hemple Prown は、南部の白人男性にとっての黒人女性のステレオタイプ同様に、この黒人女性は Nelson の性的欲望の対象になりつつ母親としての役割も果たすと指摘する (72)。Prown は上の場面に続いて Nelson が示す “sign of dependence that he seldom showed” (223) という Mr. Head に対する依存の仕草は、そのような黒人女性のイメージに Nelson が圧倒されたための反応であると続け、一時的に祖父と孫の関係は回復したのだとする。

Prown は Nelson がこの黒人女性に対して、母性とセクシュアリティの双方を感じると指摘するのだが、それを本論の文脈で捉えなおすと次のようになる<sup>2</sup>。まず、Nelson は黒人女性を見つめる際に、彼女の腕や胸に取り込まれることを夢想する。これは母親を持たない Nelson が彼女の母性に惹きつけられ、「母親」としての黒人女性と一体化したいと無意識に欲求するからだと考えられる。しかし同時に、彼女の首筋や大きな胸、むき出しの腕に視線を這わせる Nelson は彼女を性対象としても捉えている<sup>3</sup>。黒人女性が体現するセクシュアリティは、黒人も女性も知らない Nelson にとって圧倒的な他者性を帯びている。そのような「他者」と遭遇することで、おそらく Nelson の「自己」は輪郭を与えられる。

また、O'Connor が上の引用で触れる “black forms moving up from his unconsciousness” は、作品の次の一節を前提としている。

The boy was dozing fitfully, half conscious of vague noises and black forms moving up from some dark part of him into the light. His face worked in his sleep and he had pulled his knees up under his chin. (225)

冒頭で描かれた Nelson の胎児を思わせる特徴的な眠り方が反復されてい

るが、ここでは黒人女性を連想させる“black forms”が明るい場所に出ようとしている。Nelson は黒人女性に母性とセクシュアリティの双方を感じ取り、彼女との一体化を望みながら、彼女の他者性に触れることで「自己」を発見してしまいそうになる。その不安が彼の「途切れがち」な眠りに表れているように見える。

人種差別的イデオロギーを公然と示す Mr. Head は、Nelson が黒人女性に対してセクシュアリティと母性を見出すことを容認できない。Nelson の腕を引き、“You act like you don’t have any sense!”と叱りつける Mr. Head の過剰な反応は、孫との一体関係に依存するからこそ、彼が Nelson の中に生じた欲求を敏感に察知していることを示している (223)。その後 Nelson が Mr. Head に対して示す “sign of dependence that he seldom showed” は (223)、Mr. Head から分離してしまうことに対する Nelson の恐怖を体現している。

孫が自身から分離する可能性を目の当たりにした Mr. Head は、それを防ぐために Nelson の恐怖を利用する。眠っている Nelson を 1 人にし、起きたときに Mr. Head がいないという方法で Nelson をこらしめようとするのだ。しかし、Mr. Head の予想に反して、飛び起きた Nelson は突然一人になった恐怖でパニックに陥り走り出して、走った先で太った白人女性にぶつかってしまう。

He had never in his life been accosted by a policeman. The women were milling around Nelson as if they might suddenly all dive on him at once and tear him to pieces, and the old woman continued to scream that her ankle was broken and to call for an officer. Mr. Head came on so slowly that he could have been taking a backward step after each forward one, but when he was about ten feet away, Nelson saw him and sprang. The child caught him around the hips and clung panting against him. (226)

母を求めた Nelson は、Mr. Head という「父」を見失った先で、女性に対する恐怖を経験する。そして、おそらくその恐怖から逃れようとして、祖父との未分離の状態への回帰を望み、Nelson は祖父にしがみつくと。このときが Mr. Head にとって Nelson を自身のイニシアチブのもと、自分から分離しない存在に永遠に留めてしまうという目的を達成する最大の好機であるはずだ。しかし、Mr. Head は自分が彼女らの非難の対象になりかわることを恐れて、“This is not my boy”, “I [have] never seen him before” と述べ、2人のつながりを否定してしまう (226)。そのあと、Nelson は自身の中に再び “black mysterious forms” が立ち上がるのを感じる。

As for Nelson, his mind had frozen around his grandfather's treachery as if he were trying to preserve it intact to present at the final judgment. He walked without looking to one side or the other, but every now and then his mouth would twitch and this was when he felt, from some remote place inside himself, a black mysterious form reach up as if it would melt his frozen vision in one hot grasp. (228)

この出来事は、Nelson にとって肉親から血縁関係を否定されることであり、Nelson の「自己」が強制的に Mr. Head から分化される契機となる。Mr. Head は “the boy's steady hate” を察知するが (228)、Nelson の憎しみが描かれるのは、1章でふれた電車内で黒人男性に出会った場面と、この場面の2か所のみである。先にも触れた前者の場面において、Nelson の憎しみは本来黒人ではなく、祖父のやり方に向けられるものである。祖父の裏切りを経験し、「自己」が Mr. Head と分離するからこそ初めて、Nelson は憎しみを祖父に向けることができる。そして、このとき Nelson の「自己」が “black forms” によって仄めかされることは、彼の「自己」が「黒い母」と一体化した形で捉えられていることを意味する。Nelson の「自己」の発見と「黒い母」との一体化の欲求は一見矛盾するようだが同時に生



じるのだ。

#### 4. 黒人像と救済

分断された関係のまま、たどり着いた黒人像のもとで、**Mr. Head** と **Nelson** は不思議な形で和解を果たす。本作の核となるこの場面についての解釈をもって本論の結論としたい。

“An artificial nigger!” Nelson repeated in Mr. Head’s exact tone.

The two of them stood there with their necks forward at almost the same angle and their shoulders curved in almost exactly the same way and their hands trembling identically in their pockets. Mr. Head looked like an ancient child and Nelson like a miniature old man. They stood gazing at the artificial Negro as if they were faced with some great mystery, some monument to another’s victory that brought them together in their common defeat. They could both feel it dissolving their differences like an action of mercy. Mr. Head had never known before what mercy felt like because he had been too good to deserve any, but he felt he knew now. He looked at Nelson and understood that he must say something to the child to show that he was still wise and in the look the boy returned he saw a hungry need for that assurance. Nelson’s eyes seemed to implore him to explain once and for all the mystery of existence. (229-230)

序論で述べたように先行研究ではこの場面において **Mr. Head** が啓示を経験しているという解釈が一般的である。しかし、一体化と分離をめぐる物語として本作品を読むと、以上のような解釈はナイーヴと言わざるを得ない。なぜなら、**Mr. Head** と **Nelson** の類似が再び強調されることは、**Nelson** の「自己」は冒頭の未分化の状態に戻ることを示すからである。

Mr. Head は Nelson に黒人を見せることを通して、Nelson との一体関係を確固たるものにしようと画策する。しかし、黒人女性との出会いは、Mr. Head の目論見に反して、Nelson の分離を招いてしまう。それは、Nelson が彼女の母性との一体化を望むと同時に、彼女のセクシュアリティに他者性を認めることで、「自己」を発見しそうになったからである。しかし上の引用において、Mr. Head と Nelson は黒人像を見ることを通して、一体関係を修復している。このことが示すのは、黒人女性が体現した Nelson にとっての他者性とは対照的なものを、肉体を欠いた「男性」の黒人「像」が体現しているということである。黒人像を見つめることによって、Nelson が「自己」を発見する可能性は消失する。つまり、彼らが経験する宗教的な贖いの感覚は、「啓示」ではなく、「像」によって可能となった幻想であり、Nelson が Mr. Head の目論見に反する形で経験しようとしたイニシエーションが、失敗に終わったことを示唆しているのだ<sup>4</sup>。

注

<sup>1</sup>Angela Alaimo O'Donnell は黒人を “merely a tool in the fiction writer's hand” として読み解くか否かで研究者の議論が分かると指摘するが (115)、どちらの場合においても、黒人像と啓示の間にある飛躍を読み解くことは本作を論じるうえで重要なトピックである。Edward Strickland が Nelson にイエスを重ねて解釈するように、黒人を要点としない解釈もあるが (459)、編集の反対にあいながら O'Connor が差別用語である “nigger” をタイトルに用いた本作では、最後の場面は人種の問題に紐づけて解釈するべきだろう。

<sup>2</sup>Thomas F. Haddox は都市と性の関連の深さを指摘するが、Mr. Head の視線がアトランタで白人の娼婦を捉えるのに対し、Nelson の視線はこの黒人女性に出会うまで女性を捉えていない。このことから、Nelson が黒人の女性にひきつけられたことも、彼女の他者性故であると考えられることができる。

<sup>3</sup>Doreen Fowler は “The ‘pitchblack tunnel’ that Nelson conjures is a scarcely veiled image of the vagina/birth canal through which Nelson feels as if he is ‘reeling’ back to his true place of origin” と指摘し、“the pitchblack tunnel” という描写からセクシュアリティと母性を読み取る (26)。

<sup>4</sup>このような宗教的経験は全知の語りを通して語られる。しかし、Jeanne Perreault や W. F. Monroe は物語冒頭的全知の語りを通して描かれる Mr. Head の全能感と物語の進行の矛盾をもって、語りが Mr. Head の感覚を反映するものであると

位置づける。

### Works Cited

- Desmond, John F. *Risen Sons: Flannery O'Connor's Vision of History*. U of Georgia P, 1987.
- Fannin, Jordan Rowan. "The 'Strange Fruit' of Flannery O'Connor: Damning Monuments in Southern Literature and Southern History." *Literature and Theology: An International Journal of Religion, Theory, and Culture*, vol.35, no.3, 2021, pp.309-27.
- Fowler, Doreen. "Deconstructing Racial Difference: Flannery O'Connor's 'The Artificial Nigger.'" *The Flannery O'Connor Bulletin*, vol.24, 1995-96, pp.31-39.
- Haddox, Thomas F. "The City Reconsidered: Problems and Possibilities of Urban Community in 'A Stroke of Good Fortune' and 'The Artificial Nigger.'" *Flannery O'Connor Review*, vol.3, 2005, pp.4-18.
- Lake, Christina Beaver. *The Incarnation Art of Flannery O'Connor*. Mercer UP, 2005.
- Monroe, W. F. "Flannery O'Connor's Sacramental Icon: 'The Artificial Nigger.'" *South Central Review*. vol.1, no.4, 1984, pp.64-81.
- O'Connor, Flannery. "The Artificial Nigger." *Flannery O'Connor: Collected Works*, edited by Sally Fitzgerald, Library of America, 1988, pp.210-31.
- . *Mystery and Manners*. Farrar, Straus & Giroux, 1969.
- . "To Ben Griffith." *Flannery O'Connor: Collected Works*, edited by Sally Fitzgerald, Library of America, 1988, pp.931-32.
- O'Donnell, Angela Alaimo. *Radical Ambivalence: Race in Flannery O'Connor*. Fordham UP, 2020.
- Perreault, Jeanne. "The Body, the Critics, and 'The Artificial Nigger.'" *Mississippi Quarterly*, vol.56, no.3, 2003, pp.389-410.
- Prown, Katherine Hemple. *Revising Flannery O'Connor: Southern Literary Culture and the Problem of Female Authorship*. UP of Virginia, 2001.
- Strickland, Edward. "The Penitential Quest in 'The Artificial Nigger.'" *Studies in Short Fiction*, vol.25, no.4, 1988, pp.453-59.
- Wood, Ralph C. *Flannery O'Connor and the Christ-haunted South*. Eerdmans P, 2004.